

乳幼児発達検査の変遷と保育への応用

木戸 啓子 (岡山大学大学院教育学研究科) 山口 茂嘉 (岡山大学教育学部)

本研究は、発達検査が保育場面での子ども理解の手だてとなり得ることを明らかにするものである。発達検査を行う一つの効果は、対象となる子どもの現在の発達状況を把握できるという点にある。その上で、子どもの状態をとらえながら、指導に必要な観点を予測することこそが発達検査の意義であるといえる。今日用いられている子どもの発達検査は、ビネー式知能検査を原型として発展してきた。その発達検査の歴史的な変遷について概観し、日本で用いられている発達検査がどう位置づけられているのかを整理し、保育場面での活用の可能性を検討した。

キーワード：発達検査、津守式乳幼児精神発達質問紙、保育

I. はじめに

発達検査とは、子どもの発達状態を診断するための、標準化された検査法である¹⁾。発達診断そのものは小児神経学、児童精神医学、発達心理学など多くの専門分野にまたがる臨床システムによってはじめて可能であるが、そのシステムにあって標準化された発達検査の果たす役割は大きい。検査の手続きは、観察を中心としているので、作業能力や言語能力の低い乳幼児の精神発達の理解にも適している²⁾。例えば、何らかの発達上の遅滞があるかどうかをみることもできれば、発達プロフィールや項目間のばらつきから問題の原因を考えるということもできる。このように、発達検査には、子どもの発達上に起こりうるさまざまな問題を探ることの目的があげられる。しかし、それだけに限らず、発達検査は、保育や療育上の指導計画をたてる段階での指針を得ることで、その効果の測定といったことの目的でも用いられている。

ここでは、発達検査がどのような目的で用いられているか、発達検査の歴史をふまえた上で、現在用いられている発達検査について概観する。

II. 発達検査の目的

発達検査は、何のために行われるのであろうか。検査を実施する者は、その目的を明確にし、それにながった検査の種類を選び実施しなければならない。例えば、乳幼児健康診断は、発達上に起こりうるさまざまな問題を探ることを目的としているが、特に、その場面における発達検査の大きな目的の一つは、

一見健康そうに見える子ども達の中から発達上に問題のある子どもをみつけるということである。すなわち、それは、短時間内に大勢の子ども達を対象にして発達遅滞や歪みのありそうな者をみつけることを目的としている場合であるため、スクリーニングという手法が用いられる。また、医療の場面では、明らかな身体的疾患のある子どもに対して、精神的な発達状態を知る目的のために実施されることもある³⁾。身体的疾患のある子どもの場合には、知的な面で遅滞を伴っているかどうか、あるいは情緒・社会的な発達の状態はどうかといった点を知る必要があり、知的発達遅滞の有無や程度が疾病の診断や治療の一つの手がかりとなることもある。また、身体的疾患のために二次的に社会・情緒的面の発達に影響があらわれていることもあるため、発達検査を必要としている。

さらに、福祉の場面においては、保育や療育上の計画を立案することやそれらの効果を測定することを目的とし、保育や養護を希望する者に対して、入所が可能かどうかを決める資料の一つとして実施される⁴⁾。つまり、集団保育・養護を前提とした発達検査の場合には、その子どもの発達状態が集団生活に耐えうるかどうか、入所したとしたら発達どの面により援助を必要とするかを知るために、生活能力の面を重視して発達をみることが求められる。

このように、検査を用いるにあたって、それぞれ目的にながった種類の検査法を選び実施する必要がある。このことから、発達検査は、目的をもって用いることに意義があるのであり、目的を明確に

しないまま発達検査をしても、それは検査を受ける子どもにとって迷惑なばかりでなく、その結果も十分に役立てられないことが多いと思われる。いいかえれば、発達検査の結果は「正常である」とか「異常である」とかという判断だけではすまされないものであり、その結果は、子どものよりよい発達を促すという枠組みにてらして教育・福祉・治療的支援やガイダンスの資料として教育的意義のもとで役立てられねばならないものなのである。

Ⅲ. 発達検査の歴史的概略

発達検査は、子どもの精神発達の程度を測定するために、特に作られた検査である。これは、子どもの知能検査にあたるものといえるが、対象が年少であるために、成人に適用されているものとは異なる特色がある⁵⁾。

したがって、発達検査と知能検査との違いは、発達と知能の定義によるといえる。知能の定義においては、多くのものが「抽象的に思考し、推理する能力とそれらを目的に合わせて使用する能力」であることを強調している。しかし、乳幼児期には抽象能力や言語能力が十分発達しておらず、検査することが困難なので、主として感覚運動的機敏度を測定する検査となる⁶⁾。すなわち、このような検査を一般的に発達検査というのである。乳幼児の場合、肉体的発達がかなり精神的発達と一体となっているという視点から、知能検査としてではなく心身の一般的な発達程度を調べる発達検査として適用されているものが多いということである。

発達検査は、その結果をほぼ知能検査と同様に処理し、知能指数 IQ (intelligence quotient) に対応するものとして、発達指数 DQ (development quotient) を算出することが多い。発達検査が、後の知能の予測に有効かという点については、多くの結果が否定的である。少なくとも、2,3 歳以前では、児童期の知能との相関も低い。それ以後、年齢が高くなるにつれて後の知能に対する予測性が高まってくる。これは、乳幼児の反応が不安定なこと、先の例にみられるように、問題に取り上げられている機能が、年齢により次第に変わってくることによると考えられる⁷⁾。

しかし、発達検査は、子どもの発達の現状を診断するためには、有効である。発達検査自体が、年齢による主要な機能の展開の順序を示しており、また、よく標準化されるならば、全体の標準的資料を示すことができる。これは、個人あるいは集団の発達過程の診断の助けになる。

現在、我々の用いている発達検査のそもそもの始まりは、20 世紀初頭にフランスでビネーが考案した検査にいきつく。厳密には、ビネー(Binet,A.)が 1908 年に公表した検査がそれであり、今日の知能検査や発達検査の原型とされている⁸⁾。ここでは、ビネーの知能検査がどのような歴史的な経過をたどっているのか、また、日本で用いられている発達検査が、それとどう関連づけられているのかを検討することにする。

1) ビネーの検査

一般に、発達検査には、個人式と集団式とがあり、前者は、ビネー式知能検査とウェスクラー式知能検査の 2 種類に大別される⁹⁾。ビネー (Binet,A.) が 1908 年に公表したのが、世界で最初の知能検査である。その目的は、小学校入学時における精神遅滞児の識別であった。その後、シュテルン(Stern,W., 1912)によって提案された知能指数の概念による表示法の工夫やターマン(Terman,L.M., 1916)の標準化などによって測定法として整備された。

ビネーの検査は、さまざまな課題に対する子どもの反応と年齢との間に一定の関係があることを原理としたものである。子どもの反応をその年齢からとらえる方法は、その後、心身の諸機能のあらゆる領域に適用され、各種の発達検査が作成されてきた¹⁰⁾。

ビネーの尺度は、様々な内容の検査問題を、年齢別に配列したものであるから、その尺度を用い、子どもの示す反応や特徴を調べれば、その子どもの精神発達 (mental age) が、どれほど進んでいるか判断できることになる。

2) スタンフォード・ビネー検査

ビネーの検査は、その方法が非常に優れたものであるために、最初に発表されて以来、直ちに世界各国に広まり、それぞれの国の児童に適するように翻案改訂標準化されるようになった。多くの研究者がビネーの検査の改訂を試みているが、特に有名なものは、スタンフォード大学のターマン(Terman, L.M., 1916)による改訂である¹¹⁾。ターマンの改訂は、スタンフォード増補改訂版と呼ばれ、しばしば、スタンフォード・ビネー検査と略称されている。このスタンフォード・ビネー検査 1960 年版では、検査結果は、発達の水準を示すものではなく、同一年齢層の被験者集団の中での相対的位置づけを表す指標として用いられるようになったのである¹²⁾。

日本では、鈴木治太郎が、大正時代にスタンフォー

ド・ビネー検査を改訂して、日本の子どもに適用できるように標準化している¹³⁾。鈴木・ビネー式知能検査法や田中・ビネー式知能検査もいくつかの修正が施されているとはいえ、基本的には、ビネーの考え方を受け

継いだ検査である。鈴木・ビネー式知能検査¹⁴⁾と田中・ビネー式知能検査¹⁵⁾のうち3歳児の問題の例を表1、表2に挙げる。

表1. 鈴木・ビネー式知能検査による3歳児の検査項目

分類内容	行動項目	採点基準
短文の反唱	「今日は、よいお天気です」というような短文を聞き、その通りに言う	3文章の中のどれか1文章が、1度読んだだけで文章の文字通りに正しく反唱できたら合格
2線の比較	長短2本の線を比較し、長短を指さす	初めの3回の中3回とも正しければ合格
数の勘定	4つの硬貨を数える	必ず指を当てて要求した通りに数えたら合格
了解問題	日頃経験する状態についての問いからその処置を答える 「お腹のすいた時はどうするか」「眠たい時はどうするか」	3つの中2つの答えが正しければ合格
正方形模写	手本にしたがって正方形を描く	3つ描いた中1つだけできたら合格
美醜の比較	美醜一对の顔を比較判断する	全部の正当を得れば合格

表2. 田中・ビネー式知能検査による3歳児の検査項目

分類内容	行動項目	採点基準
用途による事物の指示	「水を飲むものはどれですか。その上に指をあてて下さい」という指示に答える	6問中5問以上正答を合格
トンネル	積み木でトンネルを作っておき、それと同じ物を作る	トンネルが崩れずに立っていたら合格
縦の線を引く	クレヨンで垂直線を描いた手本を見て、同じものを紙に描く。	曲がっていても1つの線になっていれば合格
絵単語	提示された絵について「これは何ですか。これをなんと言いますか」という問いに答える	17問中10問以上正答を合格
物の名称	提示された絵について「これは何ですか。これをなんと言いますか」という問いに答える	6問中5問以上正答を合格
動物の絵	10種類の動物の絵を見て、同じ動物の絵カードを当てる	9問中4問以上正答を合格
円の大きさの比較	大小2つの円を比較し、大小を指す	2回ともできた場合のみ合格
ボタンの分類	白と黒のボタンを分類する	誤りなく2分間に全部分類できたら合格
絵の組み合わせ	2つに切った絵を組み合わせ、1つの絵を作る	2問中1問以上正答を合格
3数詞の復唱	7-4-9というような3つの数を指示通りに復唱する	3問中1問以上正答を合格
了解問題	日頃経験する状態についての問いからその処置を答える 「お腹のすいた時はどうするか」「眠たい時はどうするか」	2問中1問以上正答を合格
絵に対する反応	絵を見て、絵の中のもの3つ以上を列挙する	2回目できれば合格

鈴木・ビネー式知能検査と田中・ビネー式知能検査の両者ともに、課題は、言語、動作、記憶、数量、知覚、推理、構成など様々な内容からなるが、一般知能

を測定している¹⁶⁾。そのため、社会性や生活習慣など日常生活場面での活動内容をふくんでおらず、子どもの発達状況全般を示すことはできにくいと思われる。

3) ビューラー・ヘッツァーの幼児テスト

ビネーの検査は、いくつかの改訂版を生んだが、やさしい問題を増やして、低年齢層の被験児にも適用できる尺度の作成が試みられた。乳幼児にも適用できる尺度は、乳幼児発達検査などと呼ばれるが、その代表的な検査の一つとして、ビューラー(Bühler,C., 1932)とヘッツァー(Hetzer,H.)の検査がある¹⁷⁾。これは、6歳までの乳幼児を対象とした検査で6つの行動領域から構成されている。そして、この検査では、頭に布をかぶせて乳児の反応をみたり、水で満たされた容器を運ばせたりするなど課題状況の設定に工夫がなされてい

ること、発達表示法として初めて発達指数が用いられたことで知られる¹⁸⁾。ビネーの検査に比べて主な違いは、一つには、出生直後からの検査が可能であるという点にある。もう一つには、ビネーの検査の本来の目的は遅滞児の識別であったのに対し、ビューラーとヘッツァーの検査では、子どもの知的機能の諸側面を体系的に考えようとして個々の乳幼児のあらゆる精神機能を検査しているという点にある¹⁹⁾。我が国で、牛島義友(1939)らによって作成された乳幼児精神発達検査²⁰⁾は、ビューラーの検査を翻案したものである。牛島らによる乳幼児精神発達検査問題のうち、3歳児の問題を表3に挙げる。

表3. 牛島らによる乳幼児精神発達検査の3歳児の行動項目

分類内容	行動項目	採点基準
社会性	100枚のカードを1回の命令で分類する	5分以内に完了すれば合格
社会性	日頃経験する状態についての問いからその処置を答える 「お腹の空いた時どうするか」「眠たい時どうするか」	規定回答以上に答えれば合格
学習	4つの隠された物のうち3つを見つけ出す	4問中3問正答を合格
学習	2語復唱をする 「小さな人形」「猫が逃げます」「太鼓をたたく」	3問中2問以上を正しく復唱できれば合格
学習	検査者の描いた円を模倣して描く	規定以上であれば合格
学習	検査者の作った十字架や階段のような積み方を模倣する	2問中1問正確にできれば合格
学習	位置関係を理解する 「この積み木を箱の上に置きなさい」「この積み木を箱の後ろに置きなさい」	5問中3問正答を合格
創造力	棚から物をとる時、椅子を使うことができる	所定の椅子を引き寄せてその上に登り物をとることができれば合格

ビューラー・ヘッツァーの幼児テストの第一の特徴は、乳幼児の精神発達を6つの面に分けて、そのおのおの面について検査するようになっていることである。その6つというのは、感覚、身体運動、社会性、学習(記憶および模倣)、物を扱うこと、創造力である。ビューラーは、社会性の行動項目が入ってくることによって、単に知的発達だけでなく、精神発達全体をみることが、この検査の特徴だとしている²¹⁾。

しかし、日常生活場面への応用を試みようとするならば、社会性の行動内容である「100枚のカードを1回の命令で分類する」「お腹がすいたときには、どうしますか」といった項目は、子どもの日常生活で自然に表れる社会性の行動というより、社会性が発揮されると考えられる行動についてその反応を測定すると

いった面があるように思われ、知能検査の意味合いが強いように見受けられる。さらに、3歳児からの行動項目は8問ずつとなっていることから、ビューラーのいう精神発達全体をみることからすれば行動項目が少ないのではないかと思われる。

4) ゲゼルの発達診断

子どもの反応をその年齢からとらえる方法は、その後、心身の諸機能のあらゆる領域に適用され、各種の発達検査が作成されてきた。主なものには、ゲゼル(Gesell,A., 1925, 1941)の発達診断をあげることができる。ゲゼルは、まず、正常な乳幼児の発達過程を明らかにして、その知識に基づいて診療を行う必要があり、このような診断を通じてさまざまな心身の障害が早期に発見でき、適切な治療と指導を行うことができると

した²²⁾。ゲゼルが考案した観察項目は、ビューラーとヘッツァーの検査項目に比べて、各観察項目は、乳幼児にとって、極めて自然なもので、用具類も親しみをもつことのできる遊びの様相の強いものになっている。このゲゼルの発達検査の概念に基づいて日本の子ども用に構成されたものに、生澤雅夫(1980)らによって作成された新版 K 式発達検査²³⁾、津守真(1961)による乳幼児精神発達検査法^{24) 25)}がある。

生澤による新版 K 式発達検査の目的は、精神発達のみならず、姿勢・運動領域、認知・適応領域、言語・社会領域に関する検査場面を設けて、その領域の全般的な進みや遅れ、バランスの崩れなどを調べ、療育に役立てることにある²⁶⁾が、3歳児以上の年齢級には、姿勢・運動領域の項目が存在しない。このことについて、生澤は、「この領域の検査項目として、日常生活経験の有無や練習量の影響をあまり受けず、また、実施の容易な検査項目が見だしにくいのである²⁷⁾」としている。そのため、3歳児以上を対象とする場合は、認知・適応領域、言語・社会領域に重点を置いた知能検査の意味合いが強くなると思われる。

一方、津守による乳幼児精神発達検査法の意味は、それまでの発達検査が、子どもを科学的にみようと項目を設定しているのに比べて、母親に0歳から7歳までの子どもの日常生活の中にあられるままの行動を尋ね、その結果を集めているという点にある²⁸⁾。それらの行動を、運動、探索・操作、社会、食事・生活習慣、言語の各領域から理解することが目的であり、個々の行動項目をみていくなれば、子どもは幼児期にどのような行動を示すか知ることができる²⁹⁾。

つまり、ゲゼルの考えは、上述の津守や生澤の検査のように今日使用されている多くの発達検査に取り入れられているだけでなく、小児神経学的診断法に取り入れられ、早期の発達検査ならびに治療の可能性をひらくうえで大きな役割を果たしているといえる。

IV. 日本で採用されている発達検査の概観

乳幼児の発達に関する発達検査法は、個人の知的発達状態を測定する知能検査法や乳幼児の視知覚、言葉、「もの」への興味関心能力や社会性、生活習慣、運動能力などの発達の様相を知るための精神発達検査法、個人の行動特徴をとらえようとする人格検査法などい

くつか作成されている。前述の発達検査法のうち、日本の子ども用に標準化されている発達検査は、その種類もその数も実に多く、乳幼児の発達に関する検査、個別式の知能検査、集団式知能検査、その他、性格・人格に関するものや行動・社会性、親子関係、言語発達・言語理解、運動能力に関するもの、知覚・感覚に関するものを含めると子どもを対象とした発達検査は50以上となる³⁰⁾。中でも文部科学省で承認され、学校教育で用いられている発達検査は、観察の観点から8項目20種類である³¹⁾。学校教育で用いられている発達検査の種類を表4に示した。なお、この表は、文部科学省・総務省連携プロジェクトのウェブサイトである「学校インターネット『特別支援教育とユニバーサルデザイン』」より、筆者が適用範囲を加えて作成した。

教育や保育の場面における発達検査の役割は、①今まで見えなかった子ども達の特徴を知ることができる②複数の観察者のとらえかたの違いを修正することができる③同じ検査を継続的に使用していくと、個々の子どもの特徴的把握だけでなく、子ども達の発達の特徴のその時々の変化をつかむことができるということにある³²⁾。しかし、表4の「観察の観点」に着目すると、言語の異常、視知覚、行動に関する発達障害など、障害を見つける目的で発達検査が使われているととらえられる。

発達検査を行う効果の一つは、対象となる子どもの現在の発達状況を把握できるという点にある。乳幼児期には、感覚・運動領域に問題がないかどうかを知る手がかりとなり、現時点の発達状態を的確にとらえることができる。したがって、発達検査は、子どもの「可能性や潜在性(良さ)」を見いだすために行われるのであって、「できなさ」を明らかにするものではない。結果として「ここまでしかできない」という事実が示されたとしても、それは「ここまでできている」「ここまで発達している」という確認に立って、指導目標や指導内容、方法等の教育計画を立てていくことの方に意味がある。発達検査を通して子どもを理解することが発達検査の本来の目的であるとするれば、子どもの状態をとらえながら、指導に必要な観点を予測することこそ発達検査を行う第一の意義であるといえる。

表4. 学校教育で採用されている発達検査とその適用範囲

観察の観点	使用される検査	適用範囲
言葉が気になる（吃音など）	ことばのテスト絵本 ITPA言語学習能力診断検査 S-S法 絵画語彙発達検査(PVT) ビネー式知能検査	幼児～小学校低学年 3歳0か月～9歳11か月 不明 3歳～10歳11か月 1歳～成人
落ち着きのなさや行動が気になる	自閉症児の行動チェックリスト (CLAC II) WISC-III (WPPSI) ビネー式知能検査	自閉症幼児 5歳～16歳11か月 1歳～成人
目の見え方が気になる	フロスティック視知覚発達検査	4歳～7歳11か月
学習のつまずきや発達の遅れが気になる	ビネー式知能検査 新版S-M社会生活能力検査 ABS適応行動尺度 絵画語彙発達検査(PVT) WISC-III (WPPSI) K-ABC心理・教育アセスメントバッテリー 津守式乳幼児精神発達診断法 遠城寺式乳幼児分析的発達検査 ポーター式乳幼児教育プログラム	1歳～成人 乳幼児～中学生 6歳～12歳11か月 3歳～10歳11か月 5歳～16歳11か月 2歳6か月～12歳11か月 0歳～7歳 0歳～4歳7か月 障害幼児
心理的な問題を抱えている	PFスタディー MMPI	児童・青年・成人 15歳～成人
障害の程度が重い	津守式乳幼児精神発達診断法 遠城寺式乳幼児分析的発達検査 新版K式発達検査 ムーブメント教育プログラムアセスメント(MEPAIII)	0歳～7歳 0歳～4歳7か月 0歳～13, 4歳 0歳～6歳
学習障害児などの疑い	ビネー式知能検査 PRS WISC-III (WPPSI) K-ABC心理・教育アセスメントバッテリー	1歳～成人 LD児 5歳～16歳11か月 2歳6か月～12歳11か月
その他	バウム・テスト	幼児～成人

文部科学省・総務省連携プロジェクト 学校インターネット「特別支援教育とユニバーサルデザイン」より筆者が適用範囲を加えた。なお、本表で取り上げられている検査には、一部心理検査も含まれている。

(<http://www.schoolnet.gr.jp/uni/shogai/kensa01.html#02>)より取得

V. 津守式乳幼児精神発達診断法の有効性

乳幼児の精神発達の診断には、従来は、検査場面を設けて、子どもの行動を客観的に観察することにより、発達の遅滞や異常を診断することがなされてきた。表4に挙げられている発達検査のほとんどは、それぞれの発達検査の使用にあたって必要とされる注意点が設けられている。子どもとのラポールを十分にもつことや、子どもの注意力がとぎれないよう、記録に際しての注意があることなどが、それぞれの検査への習熟や基礎知識、子どもに対しての経験などが要求されている³³。しかし、日常の保育を進めながら、子どもの発達をみようとするならば、特別に時間をとって検査を行うことは困難な場合が多いと予想される。このことを補う手法による主な検査が津守と稲毛³⁴や磯辺³⁵によって作成された発達検査法である。津守による乳幼児精神発達診断法(以下、津守真による診断法で

あることから津守式と略す)は、母親(または、主な養育者)に質問紙を用いて乳幼児の発達状況をたずね、その結果を整理することにより、精神発達の診断をしようとするものである³⁶。親や養育者の観察から検査の結果を得るという、いわば間接的検査法といえる性質のものであり、子どもの日常生活の中で示されるありのままの行動項目から発達を知る唯一の方法である。

母親の観察を取り入れることに関して、津守(1995)は、「元来、乳幼児は、その生活の大部分を家庭で過ごし、しかも、その生活のほとんどすべてが養育者の管理のもとにあつて、養育者は、子どもとともに過ごす生活の中で、乳幼児が発達していく状況を観察している」³⁷とし、妥当性や信頼性についても検討した上で、「乳幼児が成長発達していく状況から、日常生活の中にあられるままの行動を集め、それを整理するならば、乳幼児の生活の全面にわたっての発

達の過程を明らかにすることができるであろう」³⁸⁾と述べている。そのようにして観察された行動を整理して秩序づけるならば、精神発達の診断の基礎にできると考えたのである。

さらに、津守は、津守式を使用する発達診断の具体的特色について、著書『乳幼児精神発達検査法 0才～3才まで』³⁹⁾の中で以下のように述べている。

- ① 母親と面接し、母親の観察にもとづく報告によって、発達の診断がなされること
- ② 検査場面のように、観察する場面が限定されず、終日の状況観察にもとづいて判断されること
- ③ 検査の結果は、検査時の子どもの状態に左右されることなく、普段の行動の全般的状況に基づいて判断されること
- ④ 検査のための設備や用具を必要とせず、いつでもどこまでも実施できること
- ⑤ 子どもの状況の如何に関わらず、実施できること。子どもが寝てしまったり検査ができないとか、また、検査を拒否するとか、落ち着きのない精神遅滞児の場合や、その他の障害をもつ子どもの場合などのように課題行動にのらないために実施できないとかということがない
- ⑥ 面接に要する時間は、約20分という短時間であること
- ⑦ 面接質問の結果は、発達年齢に換算されること
- ⑧ 発達輪郭表によって、いかなる特徴があり、いかなる領域が遅滞しているかなどをすることができる。発達輪郭表は、運動、探索、社会、生活習慣、言語の5つの領域を軸としている
- ⑨ 発達輪郭表に記載してある、本発達質問紙を構成している項目をもとにして特徴づけた発達段階は、その子どもの理解に役立ち、また指導上にも役立つ

以上のように、津守式による発達診断は、従来の発達検査では、検査困難な対象にまで、適用範囲を広げたことに大きな特色をもち、検査場面における検査のおよばない点を補うところに意義がある。それ故、子どもの日常生活における行動を通して、子どもの発達把握を目指すためには適切な診断法であり、検査場面に導入しにくい乳幼児の検査に有効である。さらに、実際に津守式を用いてクラス担任による保育効果の検討を行っており、保育の場面で津守式を用いる有効性についても効果がある点を挙げることができる。津守は、幼稚園や保育園で、クラス担任の先生が評価する場合、個人の子どものについて各項目ごとに評価するこ

とは容易ではないが、クラス全体として評価することは容易であるとして、「各項目について、クラスのどのくらいの子どものことができるかをみることによって、そのクラスの子どもの発達の概況を知ることができるであろう。それは、地域による子どもの状況の相違を反映するとともに、保育の効果をみる目安ともなる」⁴⁰⁾と述べている。クラス担任が、津守式を用いたクラスの自己評価をすることにより、保育法の適切さを反省する材料とする⁴¹⁾ことの有効性をも加味し、津守式を用いた発達診断を進めることは、有意義であると考えられる。

津守式を用いた研究として、他の発達検査の場合と同様に、障害児やダウン症児を対象とした研究を挙げることができる。自閉症児を対象とした研究としては、栗田・清水・太田(1981)によって、各質問項目の通過状況を精神遅滞児、健常児と比較し、その通過率の検討を通して自閉症児の発達特性をより詳細に分析した研究⁴²⁾や、中塚ら(1987～1990)による自閉症児の経年的行動観察から自閉症児の精神発達段階が、どの時期の発達年齢に存在するかを明らかにした研究⁴³⁾⁴⁴⁾⁴⁵⁾が挙げられる。また、原・西村(1997)らによるダウン症児の年齢ごとの質問紙の各項目の通過状況をもとに各年齢での類型化を試みた研究⁴⁶⁾など、自閉症児やダウン症といった発達障害児の発育・発達の経過を探ったものが多いことがわかる。対象を健常児とした調査に、進野・竹内・宮川(1979, 1980, 1981)らの研究⁴⁷⁾⁴⁸⁾⁴⁹⁾があるが、これらは3歳児を対象に長子と非長子、男児と女児について保護者と教師との評価の差異を検討したものである。しかし、これらの研究では、津守が考案した担任教師による保育効果の検討や指導内容との関連については、いまだ触れられていない。したがって、保育の場面において津守式を用いることにより、日常生活を送っている中での子どもの成長発達をとらえ、その上でその時々の子どもへの援助のきっかけを得ることも有効となるのではないかと考えられる。

引用・参考文献

- 1) 黒田実郎監修『乳幼児発達事典』, 岩崎学術出版社, pp.409-410, 1985.
- 2) 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保編『心理学用語の基礎知識』, 有斐閣, p.231, 1973.
- 3) 上田礼子『子どもの発達のみかたと支援』, 中外医

- 学社, pp.12-13, 2001.
- 4) 同上書 3), p.13,
 - 5) 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保編『心理学の基礎知識』, 有斐閣, p.213, 1970.
 - 6) 前掲書 3), p.12-13,
 - 7) 前掲書 5), p.213,
 - 8) 生澤雅夫『新版 K 式発達検査法 (嶋津峯眞監修)』, p.5, 1985.
 - 9) 高野清純監修『事例発達臨床心理学事典』, 福村出版, p.62, 1994.
 - 10) 前掲書 1), p.411,
 - 11) 前掲書 8), p.12,
 - 12) 前掲書 8), pp.14-15,
 - 13) 山下俊郎『幼児心理学』, 朝倉書店, p.398, 1971.
 - 14) 鈴木治太郎『実際の個別的な測定法』, 東洋図書, 1956.
 - 15) 田中寛一『1954 年改訂版田中びね一式知能検査法』, 1954.
 - 16) 松原達哉『最新心理テスト法入門』, 日本文化科学社, pp.36-39, 1995.
 - 17) 前掲書 13), p.407,
 - 18) 前掲書 1), p.409,
 - 19) 前掲書 8), pp.17-18,
 - 20) 牛島義友・木田市治・森脇要・入沢壽夫『乳幼児精神発達検査』, 金子書房, pp.114-130, 1949.
 - 21) 同上書 20), p.213, 1949.
 - 22) 小嶋謙四郎・秋山誠一郎・空井健三『小児の臨床心理検査法』, 医学書院, p.7, 1973.
 - 23) 前掲書 8),
 - 24) 津守真・稲毛教子『乳幼児精神発達検査法 0 才～3 才まで』, 大日本図書, 1961.
 - 25) 津守真・磯部景子『乳幼児精神発達検査法 3 才～7 才まで』, 大日本図書, 1965.
 - 26) 前掲書 16), pp.20-23,
 - 27) 前掲書 8), p.49,
 - 28) 前掲書 24), はしがき,
 - 29) 前掲書 16), pp.18-19,
 - 30) 前掲書 16)
 - 31) 通信・放送機構/文部科学省・総務省連携プロジェクト 学校インターネット「特別支援教育とユニバーサルデザイン」
(http://www.schoolnet.gr.jp/uni/shogai/ken_sa01.html#02) 2002.11.7 取得
 - 32) 折原明『保育のための教育心理学』, プレーン出版, pp.150-162, 2000.
 - 33) 前掲書 8), pp.105-108,
 - 34) 前掲書 28)
 - 35) 前掲書 25)
 - 36) 津守真・稲毛教子『増補乳幼児精神発達検査法 0 才～3 才まで』, 大日本図書, p.9, 1995.
 - 37) 前掲書 25), p.9,
 - 38) 前掲書 24), はしがき,
 - 39) 前掲書 25), pp.9-10,
 - 40) 前掲書 25), p.24,
 - 41) 前掲書 25), pp.29-30,
 - 42) 栗田広・清水康夫・太田昌孝「自閉症児における精神運動発達の特徴—第 1 報: 乳幼児精神発達質問紙標準得点のプロフィール」, 精神医学 23(5), pp.15-24, 1981.
 - 43) 中塚善次郎・藤居真路「自閉症候群の行動的研究 (IV) —診断類型と発達 (津守式乳幼児精神発達質問紙を用いて) —」, 鳴門教育大学紀要 (人文・社会学編) 2, pp.1-16, 1987.
 - 44) 中塚善次郎・蓬郷さなえ「自閉症児の発達過程—津守式乳幼児精神発達質問紙の横断的資料による検討—」, 特殊教育学研究 26(3), pp.11-22, 1988.
 - 45) 中塚善次郎・蓬郷さなえ「自閉症児の発達段階とその特徴—潜在クラス分析法による津守式乳幼児精神発達質問紙の分析—」, 児童青年精神医学とその近接領域 31(4), pp.259-267, 1990.
 - 46) 原幸一・西村辣作・綿巻徹・小泉善茂・山中昂「ダウン症乳幼児の発達に関する事例検討—津守式乳幼児精神発達質問紙を用いて」, 特殊教育学研究 34(4), pp.63-68, 1997.
 - 47) 進野智子・竹内チカ子・宮川芳子「乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について(I)」, 長崎大学教育学部教育科学研究報告 26(1), pp.111-117, 1979.
 - 48) 進野智子・竹内チカ子・宮川芳子「乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について(II)」, 長崎大学教育学部教育科学研究報告 27, pp.151-158, 1980.
 - 49) 進野智子・竹内チカ子・宮川芳子「乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について(III)」, 長崎大学教育学部教育科学研究報告 28, pp.139-148, 1981.

Title: A History of Tests of Infant Development and their Applications to Childcare

Keiko KIDO (Graduate School of Education, Okayama University)

Shigeyoshi YAMAGUCHI (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: This study will examine whether the tests of infant development are useful to childcare teachers in understanding children in childcare environments. Tests of development are important because they will reveal the present developmental stages of the children concerned. The purpose of the tests lies in predicting the viewpoints which are needed for guidance while understanding the developmental stages of the children. The tests of development, which started with Binet-test as the prototype, will be reviewed along with the examination of the other tests used in Japan. The purpose of this paper is to show their applicability in childcare environments.

Keywords: tests of development, Tsumori's developmental diagnosis method, childcare
